



## Empowered JAPAN 緊急ウェブセミナー

Empowered JAPAN 実行委員会はテレワークをはじめとする働き方改革や学び直しを通じた「いつでもどこでも誰でも、働き、学べる世の中へ」をコンセプトに、2018年に発足しました。東京圏および地方都市におけるテレワーク啓蒙イベントをはじめ、多くの自治体や協力会社と共に企業・個人向けテレワーク研修を実施してきました。この度のコロナウイルス感染拡大と2020年2月25日の政府基本方針に含まれた「テレワーク推奨」の呼びかけを受け、全国の組織や個人がテレワークを早期に実施するため、実践的な情報をお伝えするための緊急ウェブセミナーを2020年3月17日より連続的に無料開催しています。

### カテゴリ：

行政・医療・教育機関向け

開催日時：2020年4月20日

### 講師：



東京学芸大学附属小金井小学校  
教諭（情報部長）  
鈴木 秀樹氏



東京学芸大学附属小金井小学校  
養護教諭  
佐藤 牧子氏



## 学校再起動

### ～Teams が活性化する学びとコミュニケーション～

3月から続く休校によって、全国各地の児童・生徒と教師が「教室で学べない」という空白に耐える中、「Microsoft Teams（以下 Teams）」の活用によって、新たな学びの形へ挑む学校も生まれています。その一つである東京学芸大学附属小金井小学校の活用例について、同校の教諭で情報部長も兼ねる鈴木秀樹氏と養護教諭・佐藤牧子氏が紹介してくださいました。

国立大学附属ということで先進的な環境で教育を進めている印象のある同校ですが、休校前の状況は校内の共有 PC が 45 台、各教室には有線 LAN のみと、決して ICT 活用が進んでいる状況ではなかったと言います。

3月の休校期間は課題を出すこともなく、卒業式を規模縮小して実施する程度の対応に止まりましたが、3月中旬時点で「4月以降も休校が継続した場合に備えて、オンラインで児童と学校がつながる環境を用意したほうがいい」と管理職と鈴木氏は判断。東京学芸大学に児童アカウントを発行してもらうことも検討しましたが時間的に間に合わないことが判明。マイクロソフトと相談を進め、急速、全教員・全児童向けに Teams のアカウントを発行できたのが、新学期が始まる4日前のこと。翌日に Teams 活用を職員会議で提案し、土日を挟んで月曜の始業式には、児童に「Teams サインインマニュアル」を配布し、教員向けの研修会を実施したそうです。「不安だらけでしたが、『一度止まってしまった学校を再起動させたい。なんとかするしかない』と勢いで踏み出しました」（鈴木氏）。

それまでも同校では「フェアキャスト」というメール等を介したコミュニケーションシステムは導入していましたが、学校から家庭への連絡という一方通行型であり、全校あげての“双方向型の学習支援”はまったく初めての挑戦です。4月の時点では、Teams にアクセスできない家庭もあることを想定して試行という扱いとし、フェアキャストでも学習内容を伝えるようにしました。「学習内容には差が出ないようにしようと。でも、学習プロセスや学習成果には差が出るのが当たり前だし、差が出ないと Teams を使う意味がないですよ、と、『分からない』『やりたいことができない』を理由に使わないのはダメ。使うと覚悟を決めようと全教員に伝えました。子どもたちに学びを提供したい思いは皆一緒でしたから、反対の声はありませんでした」（鈴木氏）。

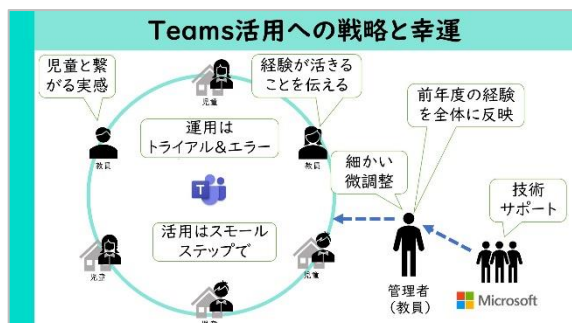
## Empowered JAPAN 実行委員会 緊急ウェブセミナー 講演レポート

以後、クラスの担任と児童が双方向につながる Teams を通じて、課題の提供や交流を続けています。実際のアクセス状況を分析すると、毎日 600 人程度のアクティブユーザーがアクセス。家庭が利用するデバイスは、スマートフォン経由が多いことも分かりました。教師たちからも、児童と継続的につながれる喜びとモチベーションアップの声が聞こえているそうです。「いきなり始めたわりには活発に使っていただけには、いくつかの要因があると思います」と鈴木氏。

その要因とは、「スモールステップ」から始めたこと。いきなりライブで授業配信に挑むようなことはせず、4 月の段階では、プリント課題をテキストベースで一斉送信し、提出は学校再開時に求める形でのスタートに。5 月以降も休校延長となれば、さらに踏み込んだ形も検討していく予定ですが、「教室の授業を再現しようなどとは考えません。トライアル&エラーを繰り返しながら、Teams という環境だからこそできる最大限の学びの提供を考えていきたい」（鈴木氏）。

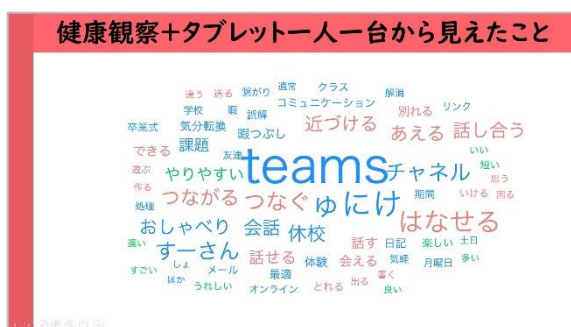
また、自身も担任としてクラス（チーム）の運営にあたる鈴木氏自身が Teams の全体の管理者となったことで柔軟な微調整に対応しやすかったということ。加えて、たまたま前年度に鈴木氏が受け持った 6 年生のクラスが、インクルーシブ教育研究の一環で「1 人 1 台タブレット」環境を導入していた経験も、今回のチャレンジに大いに活かされているそうです。「教育番組を観て Teams 上で議論したり、作品を投稿したりしました。特に“オンラインディベート”を行ったときには、集団でじっくり考えて答えを導き出す学びを教室でディベートを行う時以上に期待できると感じました」（鈴木氏）

今回の休校期間に児童が書き込むコメントには、突然会えなくなった友達とつながれることを喜び気持ちも時々見られるといい、Teams が子どもたちのコミュニケーションを支援するツールにもなることを実感しているそうです。



こういった非常時の子どもの心身のケアに ICT の双方向の特性を生かそうとしているのが、養護教諭の佐藤牧子氏です。長期休暇などに配布する健康観察カードでは、「記入がまばらになる、必要な時に必要な情報を把握することが難しいなど、サポートとしては不十分であると課題を感じていた」と言う佐藤氏は、マイクロソフトの簡易アンケート機能「Forms」による健康観察を実施。プライバシーを守りながら担任と児童一人ひとりが直接つながり、毎日継続的に体調のチェックを受け取れるメリットが大きいと感じています。

「休校（臨時休業、以下休校とする）の長期化によって、社会的な居場所の縮小、人との交流や教育機会の減少が進み、子どもたちのストレスも増大しています。学校再開後、学校生活への適応が難しくなるケースも生じると想定して、継続的に子どもたちのメンタル面の観察を続けていきたいと思っています」



3 月の休校時には、「1 人 1 台タブレット」環境だったクラスの対象児童から「Teams でクラスや先生とつながることへの感想」を集め、テキストマイニングで分析しました。結果、「近づく」「話せる」「やりやすい」といったポジティブな単語が並んだそうです。「今後はチャット機能を使った個別相談なども検討していきたい」（佐藤氏）。家庭学習中の姿勢の乱れを気にする声が保護者から届いたことから、姿勢を正す意識付けのための手作り動画も作成するなど、児童が楽しみながら健康に気をつけることができるオリジナルの工夫も加えているそうです。

約 1 カ月の実践から見てきた「休校中に目指す学びのコンセプト」として、鈴木氏は「自分のペースで、自分のやりたいことを、みんなとつながりながらやる」というイメージを描いています。「今はまさに、学びの主導権が学校（教師）から子どもに移ろうとしている大きな転換期。ポスト・コロナ時代に教師に求められるのは、授業デザイン力・情報処理能力・コーディネート力です。新しい環境の中で、何を大事にすべきか常に考えていきたいと思っています。一度止まった学校を“再起動”する先には、学校の意味を問い直す“再定義”があるはず」（鈴木氏）。佐藤氏も「情報を正しく活用する力は、生涯にわたる健康維持においても欠かせない能力になります。大人も子どもも今直面している危機を乗り越えて、自分自身を成長させていきましょう」と激励の言葉で締め括りました。